



芽を愛する人

倉 橋 惣 三

つ。これが芽を受するハンプルな喜びであり、人知れぬ楽しみである。

花をめぐる人は多い。果実を求める人は更に多い。芽を愛する人は、数多くない心友である。なぜ心友というか、行樂の友でなく、收穫の友でなく、つゝましやかな訪すれの道を共にする、静かな心の友であるからである。その訪すれてゆくや、高い梢のらんまんでもなく、広い果樹園の豊かなみりでもなく、小さくかよわく、さを急ぐ旅人には見落されがちな、木の間、草むらの、目立たない、かそけき自然の幼な子である。しかし、ひとたび、近く近づいて、見出したよるこびに見つめれば、何んという、新鮮さと溼潤さの、小さき生命の発動であろう。心友は相警めその自然を護り、あやまつて、そのやわはだを傷けざらんことをこゝろし、あせつて、その自己展開を強いざらんことを、つゝしみ、きよきは、きよしの可憐をいつくしみ、あすは、あすの生長を待

一つなみに芽とよべども、一つ／＼決して同じくない。いつまでも土にかくれてあらわれないのがあり、地殻を割き土塊をもたげてのし上るのがあり、老樹を蘇らせて、逞しい新樹に独り立ちしてゆくのがあり、親しみと信頼に、よりそい抱きついて伸びてゆくのがあり、芽ほど生長の個性のとり／＼なものはない、やわらかい日光にさそわれて、狭い庭におり立つ。この小さくくざられた地面にも、春はいろ／＼の芽を芽ぐませている。去年の草の中に新芽のまゝに咲く福寿草が黄金色の花の、あまりに早く誇りやかなのは却つて氣にかゝるが、緑の堅い小まりのような露のとうが、やがて太い

茎に伸びあんな大きな葉にひろがるのかと思えば頼もしい。

捨て、おいた花壇に列をつくつて顔を出しているチューリップの芽の可愛らしさ、花となつて、菓子のようにこつてりしすぎるよりも、却て、草の子らしい位である。草の子らしいといえは、名もよく分らない雑草の小さな芽が、ほんとうの草の子らしい無邪気さに、群り生え出しているのを見ると、どれもきつと、何んとか名のある筈なのに、たゞく、さといゝすてるのが、すまんような心がする。

木の芽は更に美しい。枯れているかとも見られるが、だんの細い枝の先きに、マニキュールした小びとの小指の爪のような紅い芽を見るのも、清潔なあでやかさを感じられ、何んというごつたことかと思われれば、柿の木のはつてりとした芽、さても尖々しいと思われれば、柔和な芽。ほんとうに芽を愛する人は、その一つ一つの美しさに惹きつけられる。

しかも、こうしたさまざまの草の芽、木の芽に感ぜられる共通の点は、そのうつくしさの充実である。又、じつと見つけている間に、そのすばらしい生長の勢に驚嘆させられることである。芽を愛するという言葉よりも、沉んや芽を慈しむという言葉よりも、芽に驚くという言葉をそ当つていることが多い。そうして、どの芽も、思いのまゝに、すく／＼と伸びさせてやりたい心もちで一ぱいになる。

伸びさせてやりたいと思うよりも、伸びる力におつついてゆけない思いさえするのは、芽というには大き過ぎる、裏の竹の子である。地割れのする程の力で土を押し上げて、矢のさ

きでもあるような小さい顔で、地面をつきぬいたと見ると、もう夕方には、ぐん／＼と寸に伸び尺に長じ、じきに小笹になり、若竹になり、初夏の風に、いき／＼とそよぎゆれる。

『富士一つうすみ残して青葉かな』（蕪村）の壯観は、歌にも絵にも、とりはやされる満地の新緑であるが、もうその時は新芽とはよばれまい。同じ新しい緑でも、青葉は集合の名であり、芽は、どこまでも個々の名である。すなわち、個として愛すること芽を愛する心である。総じて眞の愛は個を對象とすることであるが、うっかりすると見落し、踏みこじりさえしかなない、小さい芽への愛情は、徹底的個愛でなければならぬ。

芽は皆将来をもち、将来に生きている。しかしながら、誰れも、将来を考へてのみ芽を愛するのではない。その将来のためにのみ芽を護るのでもない。それよりも、将来というものを内に含む、今の小さなそのものを尊重するのである。将来に向つて進む今のけなげな向上そのものに敬意を表するのである。

芽はいつまでも芽ではない。芽は自分が芽であつたことをも忘れるであろう。芽を愛する人も、芽の今を惜しみはするが、いつまでも芽のそばに立つていようとはしない。自らをさえ忘れる芽に、長く覚えられていようとも願わない。芽はやがて芽でなくなるものである。芽を愛する人達も、それをこそ喜びとして、芽の時をあたに過ぎないよう心がける。